

昭和十六年四月一日、母と共に城北中学の入学式に行く。私の家は府立四中の隣の町であつたので歩いて行く。大日本印刷の工場の横を通り、学校の裏の坂道を登り、満開の桜のトンネルを抜け、右が城北補習学校、左が中学の仮校舎。補習学校の校庭で式が行われた。

中学の校庭は狭く、百六十人余の生徒が並ぶと一杯だった。校庭の隅に太い竹が横棒に五本位吊るされていて、体操の時間にそれを素手で登らされて苦しかった事を思い出す。服装はズボンにゲートルを巻き、ズボンのポケットは、手が入らない様に縫い合わされる。

初めての朝礼で、近藤副校長から「両親には毎日必ず朝の挨拶をする事、正座をして両手をつき、大きな声でお早う御座居ますと言う事、明日から実行するよう、言われる。翌日直ぐ実行すると母はびっくりし、いつ迄続くかしらと笑った。空襲が激しくなるまで四年間、それは続いたと思う。良い習慣だったと思う。

二年に移った下赤塚の小学校の仮校舎は駅から遠く、土埃の畑の中の道を通ったことのみ思い出し、あまり記憶にない。

三年になり、上板橋も新校舎が出来たが校庭がまだ出来ておらず、吾生徒が地ならしと整備をし、校庭を作った。三組の全員だったと思う。

校庭の隅に殆ど壊れている小さな小屋があり、それも整備の対象と思つた。その小屋は土壁で出来ていて、壁に大きな穴があいており、一人がその穴に土の塊りを投げた。当たると壁が崩れ、それが面白く私も続いて投げた。すると皆も投げ、とうとう小屋は完全につぶれ、残骸となる。それを皆で崖下に落とし、これで整備も一段落と思つた。たしか、七、八人位だったと思う。しかしそれが大きな問題となる。

全員が校庭に集合させられ、吉田先生（国語、剣道）が竹刀を振り廻し、「学校の建物を許可なく故意に破損したとして、校則違反である」と大声で叱責される。やった者は誰か、主謀者は誰か、名乗り出ると云われる。皆悪い事をしたとは思っていないので誰も出ない。再度強く言

われるので、私がやった事は間違いないので名乗り出る。続いて津布久君も。その他は出ず、二人のみ。

二人は主謀者として校長室に呼ばれ、近藤校長より厳しく叱責され、他のやった者の名前を言えと云われる。判っていたが云う必要はないし云うつもりもなし。そして何故毀したのかと聞かれ、始めから殆ど毀れていましたと答える。悪い事をしたとは思っていないのであやまりもしないし、弁解もしなかった。只黙って立っていた。それが校長を怒らせ母親を呼び出される。

母には訳を話し、私は悪い事は決してしないと言い、母も判って呉れ、校長室に入って行く。大分激しく校長に言ったらしい。監督の先生も居ず、小屋がどの様な状態であったのかも調べもせず、結果だけ処罰するのはおかしいと、約一時間で母は出て来て、これで判らないのならこんな学校はやめてもいい、と怒って帰る。

担任は野津先生（英語）。先生も事情は判ったらしいが、校長と他の先生の手前、怒らずにはいられないので、二日間教員室に座らされ大声で叱責される。普段おとなしい先生がである。しかしあやまりもせず、弁解もせず、他のやった生徒の名前も言わず、それが益々先生を怒らせる。しかし二日間で許される。しかし罰として放課後二時間廊下に座らされる。皆もいつ自分が呼び出されるかと戦々恐々であつたらしいが漸くホッとしたらしい。母のおかげと感謝している。しかし監督の先生も付けず、どの様な状態の小屋だったのかも調べもせず、結果だけで処罰するとは、中国共産党と同じであると思う。

今思うと懐かしくもあり、腹立たしくもある。事情も判っていた先生方も居られたらしいが、援護してくれる先生は誰もいなかった。その後、私は操行は丙とされ、あとあと内申書に影響した。

また、寺井先生（英語）について思い出される事がある。先生はスマートで色白で、その上お洒落で、英語の発音も綺麗で、性格も温厚で大きな声を出されない先生だったと思う。しかしその先生が一度大変な剣幕で大声で怒鳴られた事がある。それは中学四年の時、戦争も激しくなり海軍兵学校も大量に募集する様になり、城北からも大分多勢の生徒が応募した。或る日、たしか昼休みの時間に寺井先生が凄いい形相で教室に入って来られ、いきなり「皆、兵学校を何と思っているのか、お前らの英語の実力で受かると思っているのか、兵学校を舐めるんじゃない。身

の程を知れ。」と大声で怒鳴られた。普段の先生とは別人の様であった。

それだけ言うと先生はさっさと出て行かれた。皆あつげにとられた。私はおかしいと思った。普通なら、兵学校は非常に難しいから皆頑張れと励ますべきだと思う。それを一方的に叱責されるとは納得出来なかった。

若しかして先生も兵学校を失敗したのではないかと思った。

いろいろの事があり記憶が定かでないが、楽しい事、苦しい事、辛い事があったが、いずれも懐かしい思い出となった。八十五年の生涯のたった四年間の一時期が一番強烈に印象が残っている。

創業の中学、仮校舎、土地の選択、校舎の建築、戦争、勤労働員等、激動の中で、校長始め各先生方の苦労は大変だったと思う。又、吾々一期生も大変だった。それだけに思い出は鮮烈である。共に苦勞した一期生がいまだ年三回集まっていると云う事は驚きである。これも幹事の方の熱意と努力のお蔭と感謝している。此の会が最後の一人になるまで続く事を願っています。